



その17

継体天皇

—けいたいてんのう—

(平成27年12月1日号—第299号)



継体天皇は、越前国坂井郡三国[みくに]（現在の福井県坂井市）にいた男大迹[おほど]王のことで、本市の楠葉で即位したと考えられており、枚方とゆかりの深い天皇です。

『日本書紀』によると、継体天皇の一代前の武烈[ぶれつ]天皇は、後継者がいないまま、506年に大和の泊瀬列城宮[はつせなみきのみや]（現在の奈良県桜井市付近）で崩じました。

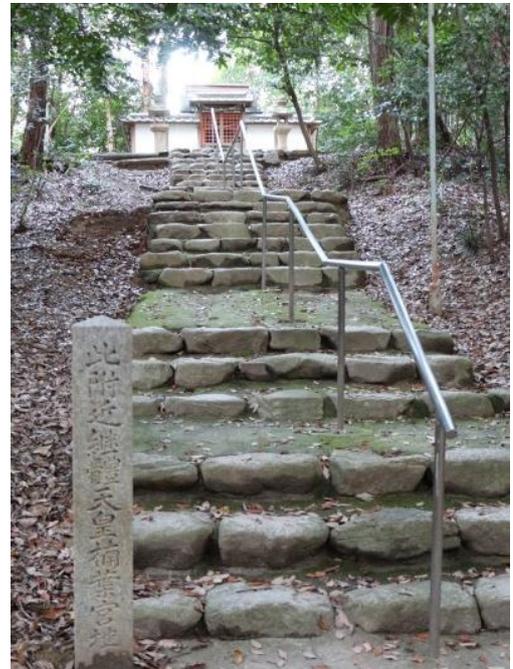
翌507年、朝廷の有力者であった大伴金村[おおとものかなむら]は、後継者として、仲哀[ちゅうあい]天皇の五世孫で、丹波国桑田郡（現在の京都府亀岡市付近）にいた倭彦王[やまとひこのおおきみ]を迎えにいきましたが、王は、迎えの兵を見ると、恐れて姿を隠してしまいました。

翌年、金村は、応神[おうじん]天皇の五世孫の男大迹王を、皇位継承者として推せんしました。他の有力氏族も同意し、この王を迎えるため、三国に行きました。しかし王は、何かの陰謀に巻き込まれるのではないかと即位を承諾しませんでした。

そこで、男大迹王をよく知っていた河内馬飼首荒籠[かわちのうまかいのおびとあらこ]が密使を遣わし、擁立にかかわった有力氏族全体の願いであることを伝え、即位の承諾を求めたところ、王はこれに応じ、樟葉宮[くずはのみや]で即位しました。

樟葉宮の詳細な位置はわかりませんが、現在の交野天神社[かたのてんじんしゃ]（楠葉丘）の境内奥にある貴船神社付近が、樟葉宮跡の伝承地として府の史跡に指定されています。また、当地は「樟葉宮跡の杜」として枚方八景の一つに選定されており、鎮守の森の静ひつな雰囲気を訪れる人のいやしともなっています。

継体天皇は、樟葉宮で5年間過ごした後、山背[やましる]の筒城宮[つつきのみや]（現在の京田辺市付近）へ移り、その7年後、同じく山背の弟国宮[おとくにのみや]（現在の長岡京市付近）に移りました。政治の中心であった大和の磐余玉穗宮[いわれのたまほのみや]（現在の桜井市付近）に移ったのは、即位してから20年後のことでした。継体



樟葉宮跡の伝承地

(場所は楠葉丘2丁目)

福井市の足羽山「あすわやま」公園にある
継体天皇像



天皇には、即位に反対する勢力があったとも考えられており、この間の移動の経緯や出自、陵墓などさまざまな点があります。

例えば、陵墓に関しては、『日本書紀』には継体天皇を藍野[\[あいの\]](#)陵に葬ったとするだけで、所在地を明記していませんが、『古事記』には、「御陵は三嶋の藍陵なり」と記されています。宮内庁は、この藍野陵を太田茶臼山[\[おおだちやうすやま\]](#)古墳（茨木市）としていますが、天皇の崩年が6世紀で、古墳の築造時期が5世紀であると考えられることなどから、今城塚[\[いましろづか\]](#)古墳（高槻市）が、継体天皇の真の陵墓であるとする説が有力となっています。

57歳で即位し、在位25年に及んだ継体天皇の時代は、朝鮮半島における高句麗[\[こうくり\]](#)、新羅[\[しらぎ\]](#)、加耶[\[かや\]](#)、百濟[\[くだら\]](#)などの動向への対応や、九州では筑紫国造磐井[\[つくしのくにのみやつこいらい\]](#)の反乱など、大和国家の支配が動揺した時代であったと言われています。

継体天皇は、こうした国内外の情勢に対応し、磐井の乱鎮定から3年後の531年に崩じました。